

巻頭言

特集「福祉文化の思想」を問う

「現代と文化」編集委員会

今号の特集は「福祉文化の思想」です。高額所得者の減税措置の導入と非正規雇用の合法化が拡大されて以来、小泉政権以後の日本社会はドラスティックな構造変化を遂げてきました。幸福を手に入れるための社会方程式に根底的な変化が発生したとも言えるでしょう。グローバル化に適應する為に必要であるとして、「規制緩和」という名の下に進んできたこの現代日本の社会変化は、ある意味では、特定の人々の「欲望の留め金 (= 安全装置)」を外し、他方では、そこから生まれる軋みに苦しむひとびとの暴発を防ぐための「管理強化」をもたらしています。「規制緩和と管理強化」というこの奇妙な組み合わせの正当化が、この現代日本社会のあちこちに棲息するようになりました。

人為的な境界線がひとびとを勝ち組と負け組に分ち、負け組になりたくなければ、身に付けた「XXX 力」を証明してくれる資格を取ることであるというのが、ある種の脅しのような呪文として語られるようになったのは、歴史上繰り返される「境界線の政治学」(杉田敦)の常です。男性/女性の区別を始め、自立/依存、正規/非正規、正統/異端、専門/素人、健常/異常などなど、この類の区分はその線を引く側がそれに意味を付与し、自らを価値化あるいは正当化する、境界線メカニズムの例であるとも言えるでしょう。そこにはアンリ・ルフェーブルが言うところの、空間を政治化し、差異的なものを排除し、ある特定の均質化へ人々を誘導する「生政治」そのもののメカニズムが見えます。

しかも、これらの境界線は社会の表層だけにではなく、私たちの意識の下層に棲みつき内面化され、パターン化された文化の領域にも及んでいるのではないかと懸念されます。つまり、区分者によって付与された意味を、区分された側が内面化(内面で受容する)するよう誘導する仕組みとセットになっているということです。例えば、正規労働と同一労働を行っているのに、非正規労働と呼ばれる側は、その「非正規」という名の故に、あたかも自身を「非正規」な存在であって、社会的にマイナーな存在として権利を有しないものであると、自己を卑下してしまう可能性に襲われます。アマルティア・センが喝破した、他者によるエンタイトルメント(自己命名権)の剥奪が、この日本社会においても吹き荒れています。

リーマン・ショック以来、この「規制緩和」(新自由主義=ネオリベ)方式に大きな破たんが生じ、オバマ現象とも言えるような、大きな揺り戻しの時代を私たちは迎えようとしています。自明の前提であるような顔をした金融工学的な成功方程式がその神通力を失おうとしている今、私たちはこれまでのような短期的な利益の積分ではなく、長期的な遠くへの目線を必要とする時

代を迎えているという予感に襲われます。目先の利益に汲々とする日々のその先に、いかなる未来を描くことができるのか知らされぬまま、青年たちは未来にそれほど期待しないことで現在という時間に耐えようとしているかに見えます。自分たちの未来は、その先行する世代の姿を見れば予想できるでしょう。60 歳以上に自殺者のピークを持つ、日本の高齢者の姿にいかなる未来を想像すればよいのか、私たちは青年たちに答えを示すことができるでしょうか。

今回の特集は、この 20 年ほどの社会変化を捉えるための試みです。社会福祉、経済、教育、治療、情報科学、経営など、ひとびとの「ふくし」に関わる様々な領域において、その自明の前提にいかなる変化が生まれているのかに関する考察と報告を広く集め、私たちの社会にいかなる変動が起きているかを検証する起点としたいと編集委員会は考えました。それは、私たちがいかなる未来を生み出すかという、あるべき「ふくし」を問う試みの始まりです。

政治の世界はドラスティックな変化の季節を迎えています。既存の制度も含めて大きな制度転換が始まるはずですが。既存の制度が未来永劫に続くことを前提とするような祖述から離れて、大胆に率直にありうべき未来を語ることが私たちの大学の存在理由を示すものとなるでしょう。

今回の特集では、みなさまから 4 本の論文を寄せていただきました。伊藤文人論文では、ソーシャルワーク（社会事業）の変容から近代 / 現代社会の変容を捉える試みを、そして、小坂啓史論文では、発達という近代概念が有する問題構制を問う試みという、私たちの生きる近代社会の根底をとらえ返す論稿をいただきました。さらに池谷壽夫論文では旧東ドイツにおける妊娠中絶問題の歴史的展開を通じて、ジェンダーという境界線を引く側からではなく、当事者の自己決定を中核とする原則へと転換する歴史的流れを示していただきました。そして、高橋紘一論文では、日本社会全体を特徴づける少子高齢化状況の地域偏差を示していただきました。その示すところは、現状だけでなく、その延長上に見えてくる将来の予測を意味します。私たちはこの長期的展望の中で現在をとらえ返すという、社会デザインの本質を問う作業を迫られていると言えるでしょう。今日を生きることが、今日を生きることにならなかつながら、その先の展望を見出し得ないまま、私たちはモグラ叩きのような個別問題の解決に追われ続け、足早な自己崩壊への道を歩いていくのか、それとも希望を失わず日々を貯めていくのかの瀬戸際にあることに、思いを馳せるべき事態に現在があることを、私たちは覚悟する必要があります。これらの 4 論文は、そうした試みの成果とも言えます。200 人余の研究・教育者を擁する本学の模索は続いていきますが、これら 4 論文を嚆矢として、この時代の総体を捉える端緒とし、その先に理想とすべき社会の構成デザインを、今後も多彩に得て参りたいと編集委員会は考えます。

この特集論文以外に、利益（commodity）を越える普遍的価値の模索を行う井上准治論文、そして「生きる力」に注目する竹下正哲論文が掲載されています。狭義の縦割り個別専門領域を、横へと貫く二つの論文は、実は、こうした特集テーマを生み出す豊かな本学の基盤であります。教養とは何かを問う前回特集に引き続き、私たちは深くこの社会を問い続けることを通じて、私たち大学にあるものの存在理由を求めて行く所存であります。